秋北バス社長の太田吉信さん

わがまち…… ROTARY
そしてロータリー

秋田県 大館市

高齢化率三〇パーセントを超えた町 いかに元気づけるか

文・池辺史生　写真・佐藤　敬

チャレンジ精神で秋田を変えよう

東北新幹線の開通で東北はずいぶん近くなった。とはいえ、秋田県の大館市はまだまだ遠い。東京から盛岡までは二時間半～三時間ほどで行けるが、その先、急行バスでさらに二時間二〇分ほど揺られなければならない。料金は二三一〇円。終点の大館駅前に到着したとき、シートベルトをはずして思い切り伸びをすると、背骨、腰骨のあたりがポキポキと音を立てたように思う。

バスのなかから二人の紳士の姿が見えた。秋北バス社長の太田吉信さんと取締役事業管理部長の加賀卓也さんとであった。駅前の忠犬ハチ公の銅像の前で初対面の挨拶（あいさつ）をするとすぐに駅前の食堂に案内された。明治三二（一八九九）年に創業の駅弁屋「花善」である。ここの「鶏めし」は、奥羽本線と花輪線の発着する大館駅の名物であり、地元育ちの太田さんたちにしても、手にすると心ときめいたものだという。店で供される鶏めしは、大館名産の曲げわっぱの器に盛られていて、確かにうまかった。小鉢のジュンサイも秋田の味だ。

さて、大館駅前になぜ忠犬ハチ公の銅像があるのかというと、東京・渋谷のハチ公の出身地であり、大館には秋田犬保存会もあるからである。ついでに言えば、比内地鶏の産

（写真右）「似ているでしょう？」と「バス＆ウォーク」運動のパンフレットを掲げる小畑大館市長（右）と太田さん。（写真左）スーパーいとくの伊藤碩彦さん

地の比内町は、平成一七（二〇〇五）年に大館市に編入されている。

秋田県というと、近年は児童・生徒の学力調査の成績が全国トップということで名を上げているが、ほかにもトップのものがある。人口減少率と高齢化率である。平成二三（二〇一一）年の総務省の統計によると、人口一〇七万五〇〇〇に対して、六五歳以上の高齢者が三一万五〇〇〇、高齢化率は二九・七パーセントで、全国一位である。平成二五（二〇一三）年のいま、すでに三〇パーセントを超えている。

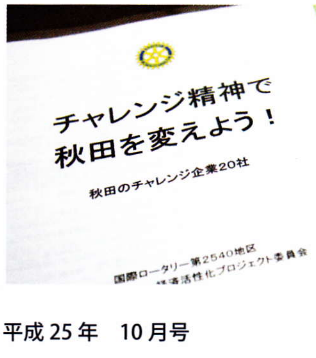
このまま衰退の道をたどるわけにはいかない。県内一〇〇〇人のロータリアンよ、決起せよ、と声を上げたのは、第二五四〇地区（秋田県）の経済活性化プロジェクト委員会である。委員長の伊藤碩彦さんは、県内外にスーパーマーケット「いとく」を展開している人で、太田さんと同じ大館ロータリークラブの会員だ。

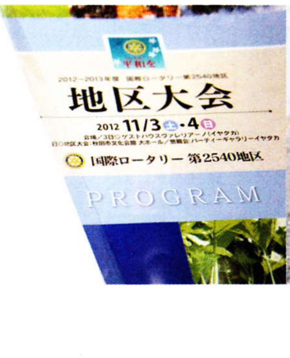
太田さんに伴われて訪ねるやいなや、伊藤さんは熱っぽく語りだした。

「秋田県下のそれぞれの地域で経済活動の中核を担っているロータリアンに、まず、自分の会社を元気にして雇用と所得を増大させてほしいと思っている。例えば、床屋さんが福祉施設でお年寄りの髪を無料で刈る。これはこれで立派な社会奉仕だけれど、ロータリアンたる者、正当な報酬をもらう形での本来の職業奉仕を大事にすべきじゃないか」

伊藤さんたちは、「チャレンジ精神で秋田を変えよう」というスローガンのもと、地元でがんばっている人や企業を探し出して、それぞれの事例発表をしてもらうことにした。

合わせて二〇の事例の掲載された冊子に目を通すと、ある、ある……。「北限の桃」の産地化を進めた「かづの農協」、横手焼きそばをB級ご当地グルメとして全国に知らしめたグループ、地域の各家庭で普通につくられていたバター餅を特産品として売り出すプロジェクトを推進した北秋田市の商工観光課、ホッキョクグマの繁殖に成功した男鹿水族館、ハタハタのしょっつるの製造販売に取り組んでいる醸造会社、秋田にプロバスケットボールチームをつくった人物など、それぞれにおもしろい。そのなかに秋北バスの「一〇〇円バス・大館市得と





く定期券」もあった。

救急車は呼ばずに バスに乗って病院へ

秋北バスのピークは昭和四〇年代（一九六五～七四年）だった。時を同じくしてマイカーの時代が到来し、バス事業は右肩下がりとなった。利用客減に応じて、路線も本数も減らしつづけたが、公共交通の使命を考えたら、これ以上減らすわけにはいかない。

大館市は、平成一七（二〇〇五）年に田代町、比内町と大合併をして、市域は九〇〇平方キロ、おおざっぱに言えば、東京都の半分に近い広さになった。ただし、人口は七万八〇〇〇。医療機関や商業施設は市の中心部にあるし、各種の会合も大館の中心部で開かれることが多いので、車のない人は大変だ。息子やお嫁さんと一緒に暮らしている人にしても、車を出してもらうのに気兼ねする。バスを使うとしても料金が片道千円近くかかるところに住む人にとっては、大きな負担だ。

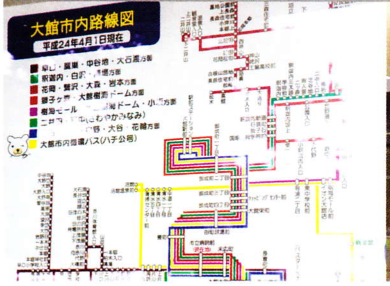
ここで、秋北バス社長の太田さんや大館市長の小畑元（はじめ）さんが協議の末に考えだしたのが、「得とく定期券」だ。大館市内限定で乗り降り自由の一か月定期券、通常一万円のものを六五歳以上の高齢者には三〇〇〇円で売るアイデアだ。差額の七〇〇〇円は大館市が負担する。一日一〇〇円の計算だから、一〇〇円バスと呼ぶこともできないではない。

「得とく定期券」には、スーパー「いとく」で買った商品の自宅への配送料金を半額の一五〇円にしてもらえたり（ねこの手便）、市内何か所かの温泉の入浴料が五〇円引きになったりという特典もある。

二年前の平成二三年七月から実施したところ、三か月定期、半年定期を含めて毎月一五〇人くらいの割合で新規に購入する人が増え、九か月後には「得とく定期券」の利用者は一三〇〇人を超えた。減る一方だった秋北バスの利用者が一年前と比べて一日当たり五〇〇人余り増えて二七〇〇人を超えるようになった。

秋北バスは、いま三〇系統二〇〇便ほどあるが、平成二〇（二〇〇八）年以降、どのバスに乗っても必ず大館市立総合病院に寄るようになっている。公立病院の医師不足・経営難が言われるなか、この病院の医師充足率は一〇〇

大館市立総合病院はすべての秋北バスが通る実質的バスセンターだ



パーセント、秋田県北部の二次医療を全面的に引き受けているので、どの地域からも市立病院に行く乗客が多いのである。

小畑市長によると、大館を支えてきた鉱山業は衰退したが、その技術を生かす形の家電のリサイクル事業や土壌浄化事業、化石燃料の代わりに秋田杉の間伐材などを燃料として復活させる事業など環境を重視した産業構造に切り替えた結果、北海道の夕張市のようにならずにすみ公立病院もきちんと維持できているという。

太田さんによると、小畑市長は老人クラブなどの集まりに出る機会があると必ず「みなさん、救急車は呼ばずに、バスに乗って病院に行ってください」と話すそうだ。「環境先端都市」を標榜（ひょうぼう）する大館の市長として秋北バスの提唱する「バス&ウォーク」運動にも賛同し、ポスターに似顔絵の使用を許しているくらいだ。

次の停留所まで歩きましょう

「バス&ウォーク」運動というのは、「自分と地球の健康を考え」て「生活改善をしませんか」という提案である。自家用車は便利だけれど、燃料を使うことでCO_2を排出して環境に負荷をかけている。だから、ときにはバスを使ったり、歩いたりしてみませんかという呼びかけである。

スーパー「いとく樹海モール」店の停留所には、こんな札が掲示されていた。

「次のバス停ドーム入口まで　歩くと一五・〇キロカロリー消費　車だと一九・五グラムCO_2排出　バスだと四・二グラムCO_2排出」

こちら、日ごろ、バスの時刻表をながめて、しばらく来そうもないと思える時は、三区間くらいは歩くことにしているので、大いに共鳴する。ただ、次の停留所までの距離が記されていないのは、不便だ。例えば、〇・五キロとあれば、七～八分で行けるな、次のバスにそこで乗ればいいな、と計算できる。そのむねを加賀事業管理部長に伝えると、この掲示は最初に作ったものでキロ数表示がないが、いまはキロ数も表示するようにしているという返事だった。

ともかくも、バス会社でありながら、バスに乗らずに、次の停留所まで歩きましょう、という呼びかけは、チャーミングである。

「足が弱ったと言う患者に、バスに乗って歩いてくれば治るよ、と言ってくれる整骨院の先生もいます。わが意を得たりです」

と、太田さんはうれしそうに笑う。

翌日、八月一六日は、「大館大文字まつり」だった。お盆で里帰りしてきた人たちも多く、高齢者ばかりの町という印象はない。太田さんは、この日も市内を案内してくれたのであるが、出会う人たちが次々に太田さんに声をかけてくる。こういう人たちのために太田さんや伊藤さんはがんばっているのだなと思いつつ、大館にサヨナラをした。

池辺史生（いけべ・ふみお）
元週刊朝日記者、現在はフリーランスの記者。
佐藤　敬（さとう・たかし）
写真家。人物の撮影を軸に活動。